

**小川真理子 <司法通訳から研究者の道へ>**

本レポートでは、司法通訳から研究者の道へ歩みはじめるきっかけと、ジェンダーを学ぶことによって自分の考えがどのように変化したのかについて、その過程を記している。

私は、裁判所や司法機関等での外国人事件の通訳を担当したことを契機に、日本における女性の権利や性別役割について考えるようになった。その後、女性学を学び始め、大学で再び学ぶ機会を得、家庭や仕事、研究生活の両立に苦悩しながらも、ようやく博士後期課程を修了するに至った。

私は、法廷等で通訳をする中で、法制度に女性の視点が抜け落ちていることに気づき、女性の人権を守るためにジェンダーの視点から社会問題を捉え直す必要があると思った。また、家庭と仕事の両立の難しさや母親役割への葛藤等、それまで自分の中に疼いている疑問の答えが見つからずにいたが、ジェンダーを学ぶことにより、自分を取り戻し、将来の展望が開けてきたように感じている。

**須賀朋子 <ドメスティック・バイオレンス予防教育への思い  
～教員から研究者への転身～>**

私は中学校の教員でありながら私生活の中ではDV被害に遭っていた。13年経った現在、どのような経過をたどりながら回復をしていったかを記すことにより、DV被害に悩んでいる人たちが「自分だけではない。仲間がたくさんいる」と感じ、周囲に支援を求めるための声を挙げてくれることを願いながら、レポートを書いた。被害から逃げるために回復の援助をしてくれたのは親ではなく、同じ立場のDV被害者であり、また、友人、職場の同僚、生徒や保護者であったことも記したかった。さらに、DV被害を受けたことは恥ずかしいことではなく、公言することにより、DV予防啓発になることを強調したい。現在、私は教員を退職して、DV予防の研究者として論文を書き続けている。自分の教え子のような若者がDVの被害者にも加害者にもならないためには、学校での予防教育が最善であると考え研究でエビデンスを出してDV予防啓発を進めていく事を日々目指している。

**平尾隆 <妻を介護して15年：支え合いの仕組みづくりへの挑戦  
-男性介護者の会「みやび」の活動を題材にして->**

筆者は、1999年1月から3歳年下の妻を介護している現在進行形の男性介護者である。本レポートは、男女共同参画の視点から男性介護者にスポットライトを当てたうえで、妻の介護を担った筆者が、男性であるがために直面した困難や課題を乗り越えてきた過程を振り返りながら、次の点を検討することを目的とした。

男性が家族介護を担うとき、どのような問題に直面するのか。なぜそれが問題として起きてくるのか。それらの問題解決のため筆者自ら立ち上げた「男性介護者の会 みやび」は、当事者組織として地域社会にどのような変化をもたらしたか。これらの活動を通して地域社会において誰もが支え、支えられることができる仕組みをつくるために男性介護者の会「みやび」は、どのような貢献ができるのか。

レポート後半部には、筆者ら複数の団体が準備を進めている「富山型ケアラズカフェ」を事例として、介護を担っても安心して暮らせる地域社会を築くため、支え合いの仕組みづくりへの取り組みを紹介する。